

新

聞の取材を受けた。変わった塾を記事にしているという。前にテレビでも同じことを言われた。

新聞やテレビの取材はだいたい引き受けることにしている。無料で宣伝してもらえるのに加えて、インタビューを受けていると、自分の考えを整理することができるからだ。聞かれることはいつも同じで、なぜこども落語を始めたのか、落語によつてこどもたちはどう成長するのか、は、ほぼ百パーセントだ。

では、答える側はいつも同じことを答えているか、と言われると、これが毎回ちがう。その時々で浮かんでくる回答が同じじゃないのだからしかたがない。しゃべってしまつてから、うーんそうだったかなあ、とどこか居心地が悪くなったり、ああこれが真実に近かつたかもしれない、と氣に入つたりしている。

こども落語を始めたのは思いつきだったので、何ゆえに思いついたかはほんとうのところはよくわからない。仕事柄、ねらいだの目標だのをまず掲げよ、と事あるごとに叩き込まれたのだが、それに苦痛を感じる教師だったのだ、ぼくは。だから散らかつたままとりあえず始めてしまった。

子どもたちがどんなふうになつていくかも、「それぞれに」としか言いようのないところがある。それ

では話が進まないから、それなりに形が整うようなことを言うけれども、言葉にしたそばからぼろぼろ漏れていくものの方に気持ちが向く。

それでも、幾度となく聞かれていたうちに、始めたころに比べれば肩の力が抜けてきたし、当たらずとも遠ざかり方は減っているような氣はしている。少しずつ止揚できているのかもしれない。

本の始末に奥出雲に通うのも終わりが近づいてきた。あらかた処分したが、これから折に触れて手にするだろうと思える本は、家に持ち帰っている。そのうちの一冊が岩波の日本思想体系『世阿弥・禅竹』で、購入したのは三十年以上も前だ。まだ買書に熱心だったころで、パラパラとめくりはしただろうがほとんど読んでいない。能に関心がわいたこともない。よくもまあいつか読むだろう程度の軽い動機で、決して安くないものに次々と手を出していたものだ。

なぜか、背表紙を眺めていたら読んでみたくなり、風姿花伝と校注者加藤周一の解説を読んだ。興奮した。世阿弥や室町時代の猿楽のイメージが一変した。とても不遜に響くだろうけれど、こども落語の座付き作者が日々向き合っていることといくつもいくつも重なるのだ。もしかた新聞のインタビュアがあつたとしたら、次は世阿弥がチャリと出てきそうだ。

老い老いに

木幡智恵美

40



千年度の夕焼け通信は、本局が横田、支局が松江、出雲郷、隠岐の三つのまま始まつた。内容はというと、Y氏が新たなタイトル「松次郎じいさんの遺書」で、短歌を織り込みながら綴り、M・Iさんの「漫画道楽記」も雑誌、映画等から話題を取り上げては掲載を続けている。K・AさんとT・Hさんの詩も毎号ではないけれども、夕焼け通信にアクセントをつけてくださった。「看護・今、むかし」のM・Nさんからは自身の看護師体験等々のエピソードが、T・Tさんからは関釜裁判について裁判の度に報告文が届けられた。前年度から投稿下さったY・Yさんの「タイムグラ便利」、出雲のK・Mさんからの「出雲弁時評」という方言の話題も夕焼け通信に時折新鮮な空氣を吹き込んでくれた。

そして、講演録が二つ。一つはこの年の二月に横田で行われた志村真氏の講演「カルトについて知っていますか」。キリスト教の牧師であるかたわら、統一教会問題やオウム真理教問題に取り組み、信者や家族のカウンセリングに関わっておられる方だ。一九九五年に起きた地下鉄サリン事件で日本中を震撼させたオウム真理教、安部元首相銃撃事件を機に一気に世間の注目を浴びるようになった統一教会を主に取り上げ、カルトにまつわる当事者や家族、様々な問題について掘り下げて語られている。講演録が終わつてからも、「オウム／カルト問題のその後」という続編まで綴つてくださった。

もう一つは、同年七月にやはり横田で行われた浜田寿美男氏の講演「ありのままを生きる」と題した甲山事件始末記申山事件の二十五年から学ぶものだ。浜田氏は発達心理学・法心理学を専門とし、冤罪事件における自白や証言に至る心理を分析、供述鑑定にも携わつておられる。ここでは、一九七四年に兵庫県西宮市の知的障害者施設甲山学園で起きた二人の園児の死について取り上げ、講演されている。副題にもあるように決着に二十五年かかつたその事件、裁判についての詳細を語られた。障がい児教育に携わっていたこともあり、毎回興味深く読んだものだ。

横田での暮らしに馴染んできている編集長は、「続ど素人畑作日記」を引き続き連載。前年に短編小説めいたものに挑戦していた私は、「忘れられゆく言葉たち」を連載することになった。

30代フリーター イランがアメリカとイスラエルの力に屈して停戦に応じた。

年金生活者 アメリカの攻撃が始まる前、アラブ調査センター（エジプト）主任研究員のハニ・スレイマンは、イランは「普通の国」になるという予測を朝日新聞で語っている。

《イランは核開発プログラムだけでなく、イスラム革命の柱である「革命の輸出」も失う可能性が高い。イランから支援を受けてきた中東各地の武装組織も軍事的、経済的な力を失っていく。イランは「普通の国」となり、地域での役割や周辺諸国との関係も変わるだろう。》（6月22日朝刊）

30代 イランが「普通の国」になるとはどういうことだろう。

年金 かつてペルシャ帝国と呼ばれた歴史を持つイランは、今もその伝統を残し、中東の「地域帝国」として振る舞っている。「帝国」の特徴のひとつは服属国を従えていることだ。イランの場合、反イスラエル・反米のネット

中東の「地域帝国」としてイランが望んだ核の保有、ないしそれに準ずる段階に至る道は、今回のイスラエルとアメリカによる攻撃によつて、当面は断たれたということが出来る。それは「抵抗の枢軸」の弱体化と相俟つて、イランが「帝国」であり続けることを困難にするだろう。

30代 アメリカは当初、イスラエルのイラン攻撃を「米国は関与していない」と人ごとのように言っていたのに、イスラエルの優勢が決定的になると、軍事介入を選択した。

年金 政治をデイルと考えるトランプとしては、状況に応じて方針を変えるのは当然だろう。

これに対し、イスラエルの姿勢は一貫している。イランを軍事的にも経済的にも弱体化させ、核武装をさせないためには、アメリカがなんと言おうと、手段を選ばない。

その背景としてホロコーストを考えないわけにはいかない。主犯はナチスドイツだったが、欧州の諸国はそれを

ワーク「抵抗の枢軸」を構成するガザの「ハマス」、レバノンの「ヒズボラ」、イエメンの「フーシ派」などの武装組織がそれに相当する。スレイマンは、これらの組織が弱体化することイランが「普通の国」になると言う。すなわち「帝国」ではなくなっていくということだ。

「帝国」であるイランが「国民国家」であるイスラエルに攻撃され、核施設やインフラを破壊されるのを止められなかったさまは、19世紀の「帝国」だった中国（清）が、西欧の「国民国家」の武力に屈して半植民地化されたさまと重なる。

「国民国家」は戦争に強いのが特徴だ。その要因のひとつは、世界に先駆けて資本主義化に成功し、その経済力で軍隊を近代化したことだ。もうひとつは、国家は国民のものであり、したがってそれを守るのは国民自身だというイデオロギーが浸透していることだ。これに対し、封建制からの脱却に後れをとった当時の「帝国」は軍備の

止められなかった。国民に同質性を求め、異質性を排除しようとする「国民国家」の特性が極端化した時代が背景にあった。

迫害されたのは自分たちが「国民国家」を持たなかったからだと考え、それを持つとうとイスラエルを建国したのがシオニストと呼ばれるユダヤ人だ。国家は国民のものであり、したがってそれを守るのは国民自身だという「国民国家」の

近代化が追いつかず、国民自身が国家を守るというイデオロギーもなかった。

イランの置かれた現状はそれに似ている。だから、資本主義の発展を促すために、西側諸国による経済制裁の解除をなんとしても実現したい。軍備の近代化も早急に進めたい。そのいちばん手っ取り早い方法は核武装することだ。イランはすぐには核武装まで行かなくても、少なくともいつでもそれができるだけの技術を持つとうとしていた。

30代 イランは核施設を壊されて核武装をあきらめるだろうか。

年金 「帝国」の特徴をもうひとつあげると、域内だけでなく域外でも権力を行使しようとするところだ。核兵器はその強力な手段となる。現在の「帝国」を見ると、いずれも核を保有している。アメリカ、ロシア、中国の各「帝国」は核大国であり、欧州の「帝国」であるEUの域内にも核が配備されている。

理念は、自国の防衛はできるだけ他国に頼らないという理念でもある。

イスラエルはそれが徹底している。「国民国家」というのは他の国や民族を迫害しかねないという疑念を決して捨てない。欧州の諸国がいくら友好的な姿勢を示しても、イスラエルは警戒を解いてはいないはずだ。イスラエルが名実ともに軍事同盟と呼べるものを結んでいるのはアメリカだけであるのも、それが背景にあると推察される。

アメリカは20世紀後半まで、「国民国家」ではなく覇権国家Ⅱ「世界帝国」だった。「帝国」の特性のひとつは「国民国家」の「同質性」とは対照的に「多様性」にある。それがアメリカをイスラエルにとって例外にしている要因のひとつだ。

だが、現在のアメリカは覇権国家Ⅱ「世界帝国」の座からずり落ちつつあり、トランプはそのためのリストラを急いでいる。そういう過渡期の不安定さが、トランプ政権の頻繁な方針変更となつてあらわれている。

ニュース日記 974
中村 礼治

イランはどうか